

## Pynchon Notes についての覚書

深瀬 有希子

時は、英文学を専攻する者であれば必ずや訪れなくてはならない神保町のK書店が勢いを失い、代わってAmazonが日本の英文学界を席捲し始めた頃、私はその言葉を耳にした。『ピンチョン・ノーツ』——アメリカ文学のなかでも手ごわい部類の小説を書くことされるポスト・モダン作家トマス・ピンチョンを研究する友人が、ゼミでの発表の際に、何だか自慢げにその存在を語っていた。ピンチョンと同世代であるトニ・モリスンの研究を始めたばかりの私は、そのようなものがモリスン批評にもあれば、と少し羨ましく思っていた。

件の学術誌が（正確にはニューズレターの形で）アメリカ文学批評界に誕生したのは、いまよりも40年ほどさかのぼる、1979年10月のことである。その巻頭言は、興味深いことに、英文学研究の権威たるModern Language Association に対する、幾分かの苛立ちを示しつつ始まっている。初期『ピンチョン・ノーツ』を読むと、本誌出版前後のMLA年次大会においては、ピンチョンにかかわるシンポジウムや個人による口頭発表が採択されていなかった事実がわかる。よってそれに対して、ピンチョン研究者たちは本誌出版を通じて異議を申し立てていたのであった。

ピンチョン研究者でもない私が、なぜ20年以上も前に知った『ピンチョン・ノーツ』にかくも拘っているのか、自分でも不思議である。研究者として未熟ながらも、そこに文学研究の幻惑的魅力をかぎとった、という感じだろうか。それゆえに、この多分に文学オタク的な情熱に満ち溢れた出版当時のニューズレターのリプリント版が、本学日野キャンパス図書館の地下集密書庫に厳然と並んでいるのを見たときの感動はひとしおであった。

以上をもってして、植野先生から頂戴した学恩を語るとするのは、はなはだ不遜であると思われる。ネラ・ラーセンにも言及すべきだったかもしれない。しかしながら、本学英文学科におけるアメリカ文学研究の礎とその教育の伝統を確認するには十分であろう。植野先生、有難うございました。そして、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。